

海外メンタルヘルスの現場からⅡ

(42) 場を読みすぎる

シンガポール日本人会クリニック

医師 日暮 真由美

経団連が毎年後半に発表している新卒採用に関するアンケート調査の結果であるが、採用選考にあたって最も重視した点の一位が去年も「コミュニケーション能力」だったとのことである。この「コミュニケーション能力」という項目は、ここ15年間連続一位だそうだ。言うまでもないが、どんな企業においてもコミュニケーション能力は欠かせないものであり、取引相手に対しても、社内の人間関係に対してもコミュニケーション力は重要だ。

コミュニケーション能力には、聞くこと、話すこと以外に、非言語面の要素、たとえば話しやすい雰囲気、表情や、相手の気持ちや場を察するという能力も大事だ。そして、この非言語面は日本人が得意とするところでもある。日本では古来農耕社会の時代から、集団としての有りようや周りの空気を読むことを重要視する伝統があり、言語でのやり取りよりも、言わなくても察することのほうに美学を感じる文化がある。ちなみに、上記アンケート結果の二位は「主体性」、三位は「チャレンジ精神」だそうだ。欧米で同じアンケートをしたら、これらの項目のほうが一位になるかもしれない。

海外駐在員に抜擢されるような人はコミュニケーション能力が高い人が多いのは間違いないだろう。周囲の要請を察知して自ら動き、周囲とも忌憚なくやり取りすることが身についている人だ。しかし、時に、優秀でまじめなタイプの日本人は空気を読むことのほうが先行しすぎて、言語によるやり取りが疎かになることがあるようだ。

Aさんは海外駐在員として赴任、半年たつが、日本にいたとき以上に残業が多い。仕事量が多く、慣れない英語なので処理するのにかなりの時間がかかる。上司も含めて周りもみな忙しいので、Aさん自身も残業するのは当然だと思っている。疲れている様子のAさんに、上司は「焦らずゆっくり慣れればいい。仕事は他の人にも振りなさい。」と、早い帰宅を促すが、Aさんは新任の自分が先に帰るわけにはいかないと思う。いつまでもこんな状態でまわりに迷惑をかけ続けるわけにはいかない、皆に早く追いつかなければと、Aさんは自分では場を読んでいるつもりだ。が、自分の困っていることを周囲に相談することもなく、ただ自分の目を見た、皆も忙しそうに見えるということだけで判断している。それは過重労働につながり、とうとう体調を壊してしまった。

Bさんは若くして海外駐在員として赴任しているが、着任以来ずっと、上司の

厳しい指導に強いストレスを感じていた。上司は暴言を吐いたりなどの明らかなハラスメントをしてくるわけではないが、何事も細かく注意をしたいタイプで、また、励ましたりほめることがない。Bさんは上司に嫌われていると感じ、わからないところがあっても自分で何とかしなければと、上司に何も聞かない。Bさんは会社に行くと動悸や胃痛が起きるようになり、仕事に集中できなくなった。病院から業務軽減を推奨する診断書が出たことで、上司はBさんの体調不良を知ることになったが、上司は即刻、自分の態度がBさんに誤解を与えていたことを謝った。

場を察することを重要視しすぎると、単なるずれた思い込みになる可能性がある。日本人はお得意な非言語面でのコミュニケーションよりも、もっと言語によるコミュニケーションのほうに力を入れたほうが良いと思う。